

# 五感刺激 食に興味を

## 幼児教育・保育部門 味の教室協会 優秀賞

### 読売教育賞

教育分野で優れた業績をあげた個人や団体に贈られる「第68回読売教育賞」の受賞者が決まり、府内からは幼児教育・保育部門で、一般社団法人「味の教室協会」（北区）が優秀賞に輝いた。2〜3歳児の五感を刺激しながら、食への興味や関心を高める独自の取り組みが評価された。

（内田桃子）

保育所や幼稚園を訪れ、葉や土がついたままのニンジンやバナナやシンを広げる。子どもたち



「味の教室」を開く染井さん（右）。人形を使って話す際は、マスクをして口元を隠すという（右京区で）

に触ったり、においをかいだり味わったりしてもらい、感じたことを言葉で表現してもらい1回30分間の「味の教室」を2年前から開く。



協会代表で病院に勤める管理栄養士、染井順一郎さん（59）

「写真」は患者への栄養指導を続ける中で、偏食が多い人は病気にかかりやすいと感じた。特に幼い頃からの食の好みは、その後の生活習慣病の発症にも影響するとみて、幼児に「豊かな食体験を提供したい」と考えていたという。7年前、北欧の幼稚園で子どもが自ら感じることを重視した食育の実践があると知り、手法を学んだ。

味の教室では昆布の種類や調理の違いで、とれるだ

しの味を比べてもらうことも。アレルギーのある子にも配慮し、楽しみながら食べ物への好奇心や観察力をはぐくむ支援をしている。

保護者からは「苦手な食材に手を伸ばすようになった」「好き嫌いが減った」などと反響があり、今年度は7か所で実施している。その一つ、御室保育園（右京区）で10月中旬に開かれた教室では、園児がおもちやを含む3種類のリンゴを触り、色やにおいで本物がどうかを確認。皮ごと食べ、味を比べ、どれが好きかを話し合い、笑顔で過ごした。「味の教室での体験は将来の生きる土台になる。今後も続けてほしい」。杉本晶子園長は語る。

染井さんは「教室のことを知ってもらう機会にもなり、うれしい」と受賞を喜び、「子どもたちに食の楽しみや面白さを感じてもらえる重要性を理解してもらえたら」と話している。